

フランク・マコートとジェイムズ・ジョイス
——文学と教育の間——

Frank McCourt and James Joyce: Between Literature and Education

福岡 眞知子
FUKUOKA, Machiko

Abstract

As Mark Karr has suggested, Frank McCourt's voice can be compared with James Joyce's. There are many similarities between the two authors. It could enhance the study of literature if we examine the value of the works of both authors. We can recognize the relationship between literature and education, between writing records and writing artistic works, and between teaching language and writing books.

In this paper McCourt's trilogy is carefully read and it is pointed out that he has certain critical views, for example, against the system of the country which leads young boys to war, while he maintains his calm, humorous awkwardness toward his bosses, students and himself.

McCourt's *Teacher Man* can be traced back to James Joyce's Episode 2 of *Ulysses*, where Joyce's arts are found to describe the narrator's detachment toward his students. The reasons and the significance of Joyce's handling of anything British and historical are noticed and scrutinized.

As we investigate and compare the two writers, we can conclude that James Joyce's stance, ambition and artifices flow into Frank McCourt's bold though shy, a little experimental thick memoirs. Although there are several differences between the two writers such as their directions of writing as well as their intentions, it should also be noted that they share many similar aspects.

Key Words: Frank McCourt, James Joyce, *Teacher Man*, *Ulysses*, Irish writers

はじめに

1996年に刊行された *Angela's Ashes* (以下、邦訳と同じ『アンジェラの灰』と記す) は1997年にピューリツァー賞を受賞し、世界で600万部という大ベストセラーになった。1999年に映画化され、日本でも、映画が公開されて有名になった。

ところが、この作品の作者と彼の特質については、あまりフォローがされていない。子どものころの悲惨な現実を描いたアイルランド系アメリカ人という以上には、注目されてこなかった。しかし、作者 Frank McCourt (フランク・マコート。以下、作家・作者は「マコート」と記す) (1930 - 2009) は、『アンジェラの灰』1作だけで語るには惜しい「作家」である。「つづき」にあたる次作の *'Tis: A Memoir* (邦訳名『アンジェラの祈り』。以下、『ですわ』と記す) を読めば、なお、マコート一家の悲しくもおかしみのある「歴史」がわかる。さらに、2005年に出版された *Teacher Man* (‘Teacher Man’ とは、Mr McCourt つまり「マコート先生」と言わずに生徒が乱暴に呼びかけた「おい先公よお」というようなことばを、

マコートが、当時のアメリカの公立高校のようすを象徴すると見て題名にしたもの。以下、『先生よお』と記す) には、彼のシビアナ職業生活がどこかとほけたスタンスで描かれているのである。

ニューヨークのマンハッタンでマコートは、高校の English (イングランド語) と「書き方」の「教師」だった。『先生よお』に注目すれば、アメリカの現実が見えてくるだけでなく、たくさんの笑い、おかしみを味わえる。しかも、「作文」と「文学」の間、「記録」と「芸術」の間、「書き方のきまり」と「文学的実験」の間が、驚くほど多様に発見される。さらに、彼の中に、アイルランドの「文学」の「伝統」と「文化的傾向」がたどれる。そして、たどる中で、James Joyce (ジェイムズ・ジョイス。以下、「ジョイス」と記す) と比較すれば、いっそう、意味のある検討ができる。「書き方教育」と「文学教育」、「教育」と「芸術」の「あわい」が見えてくると考えられる。

本論文では、『先生よお』の第7章の Kevin (ケヴィン) のくだりを詳細に読解したあと、これとジョイスの

Ulysses (『ユリシーズ』) 第2挿話の教室場面を中心に比較し、それぞれの特質をさぐり、「教育」と「芸術」、教師作家の創作の「書き方」と芸術家作家の言語芸術の「書き方」の間の問題を考察する。この考察を通じて、マコート文学の特質を知り、かつ、ジョイスの大きさと意義を検討する。

1. フランク・マコートの生涯

マコートは、アイルランドのスラムから脱出してアメリカに渡り、イングランド語教師、そして彼の弟のアイルランド史の269ページに a memoirist とあるのに従えば、文学史上の「回顧録作家」になった。

作品には、*Angela's Ashes: A Memoir of a Childhood* (1996) と *'Tis: A Memoir* (1999) と *Teacher Man* (2005) の回想録三部作のほか、*Yeats Is Dead* (2001) や *Angela and the Baby Jesus* (2007) がある。

彼は1930年8月19日、ニューヨークのブルックリンに生まれた。父は北アイルランドのアルスター出身の Malachy McCourt (マラキ・マコート) (1901-1985)、母はアイルランドの Limerick (リムリック) 出身の Angela Sheehan (アンジェラ・シーハン) (1908-1981) だった。父親に飲酒癖があり、ニューヨークでも食べられずに幼児を連れた一家は、1934年、アンジェラの故郷に帰る。リムリックでの悲惨極まりないスラム暮らしは、マコートの『アンジェラの灰』に詳細に回想されている。この書(11ページ)で彼が「アイルランド人カトリック教徒の子ども時代ほどみじめなものはない」と書いているのは有名である。

弟に1931年ニューヨーク生まれの Malachy (マラキ)、1936年リムリック生まれの Michael (マイケル)、1940年リムリック生まれの Alphie (アルフィー) がいる。ほかに3人の弟や妹もいたが、乳幼児期に病気あるいは栄養失調で死亡している。

マコートが10歳のとき、父親が家族を捨ててしまう。

リムリックで貧困と闘ったマコートは、1949年、19歳で必死でアメリカに渡る。その後のことは『ですな』に痛快に、そしてロディー・ドイル風に陽気で猥雑に語られている。この回想は、母アンジェラの遺灰を母の故郷の親類の墓地に撒くところで終わっている。

ニューヨークで、はじめ、ビルトモア・ホテルの雑役の仕事でへとへとになる。やがて朝鮮戦争時に兵役についてドイツに送られ、がんばって勤め上げる。

戻ってニューヨークで様々な仕事に就きながら、兵役のおかげでニューヨーク大学に単位を取りに行けるようになり、たいへんな努力をして卒業する。

1957年に学位をとった上に、英語教師資格の試験にも受かる。多くの高校に「アイルランド人は教師にはなれ

ない」と差別を受けて拒否されるが、1958年、McKee Vocational and Technical High School in the Borough of Staten Island, New York City に就職できた。これを皮切りに、the High School of Fashion Industries in Manhattan、night classes at Washington Irving High School in Manhattan、Seward Park High School in Manhattan に勤め、修士号をとって New York Community College in Brooklyn で教鞭をとるまでになる。最後は有名な Stuyvesant High School in Manhattan に勤務して英語とクリエイティブ・ライティングを教えた (*Teacher Man*, 66等参照。なお、以下、本書よりの引用はページ番号のみを記す)。

こうして、つつましいながらもアメリカン・ドリームを実現した彼は、弟マラキや母をニューヨークに呼び寄せる。その後、マラキはバー経営、テレビ俳優などをして有名になった。また、2004年、おおらかな語り口の400ページ余りもの *Malachy McCourt's History of Ireland* を出版したほか、数冊の本を出してベストセラーにもなった。

マコートは結婚は3回しており、3度目の妻は Ellen Frey (エレン・フレイ) である。子どもは、最初の妻との間にできた Margaret McCourt (マーガレット・マコート) で、『ですな』はこの娘とエレンに捧げられている。

マコートの最大の仕事は、上記のように高校教師だった。彼は、1976年には、ノーベル賞受賞者も複数輩出している Stuyvesant 高校(著者撮影の最近の写真参照)の創作(Creative Writing)の教師として、Teacher of the Year に選ばれている。

しかも、さらに大きな業績は、退職後、「こんどは先生が書いてみたら」ということばを受けて自伝を書き、世界中で読まれ、多くの言語に翻訳され、人々の心を打ったことだった。子ども時代を描いた『アンジェラの灰』が何年も連続してベスト・セラーになって、1997年にピューリッツァー賞を受賞した。この本はハリウッドで、監督をアラン・パーカー、アンジェラ役をエミリー・ワト



2010年9月現在のスタイヴィサント高校

ソン、父マラキ役をロバート・カーライルという充実した顔ぶれで映画化された。日本でも評判になり、『アンジェラの灰』友の会」がネットに現れるほどだった（現在、閉鎖）。一躍、脚光を浴びたマコートは、ブッシュ（父）大統領をはじめ、クリントン夫妻や俳優のグレゴリー・ペックなどにも会った。テレビのインタビュー番組にも出たし（これは2011年1月時点でもインターネットで見ることができる）、世界中を講演してまわるまでになった。ほんとうに「アメリカン・ドリーム」を実現したのである。

2009年7月19日、78歳で、メラノーマのためにマンハッタンで死去した。死亡記事が、「ニューヨーク・タイムズ」他に載った。今でも、ネット情報がいくつも読める。

2.『先生よお』第7章(1)

以下では、『先生よお』の語り手が語る登場人物の「私」としてのフランク・マコートを「マコート先生」、執筆者マコートを「マコート」と区別して記すことにする。

『先生よお』の第7章は3つの挿話から成っている。Augie（オーギー）、Sal Battaglia（サル・バッタグリア）、そして Kevin Dunne（ケヴィン・ダン）の3人の「やっかいな生徒」たちそれぞれの思い出が、この順で長く語られている。

オーギーは‘nuisance’（厄介者）で、女の子たちを困らせていた。ルーツはどこにあるのかは書かれていない。Saul Bellow の *The Adventure of Augie March*（1953）を反映させているならオーギーはユダヤ系ということになるが、明らかではない。母親を呼んだら父親が現れて、何度も何度も彼をバンバンぶちめして、「尊敬を払うようにしつけているのに今度また迷惑をかけたなら、ニュージャージーまでけつをぶっとばしてやるから言ってくれ」と言って出て行った。自分で生徒をなんとかできない教師は教師でいるべきではないのだ、「道路を掃いたりごみを拾ったりする仕事を」（92）するべきだ、とマコート先生は生徒たちの冷やかな「悪意ある沈黙」を読み解く。

サルはイタリア系で、アイルランド系の Louise（ルイズ）と授業中も通路越しに手をつなぎあう。クラスみんなに、将来、ふたりは結婚して子どもを産んで、イタリア系とアイルランド系の懸け橋になるに違いないと思われていた。ところが、アイルランド系の子が公園でサルに角材で殴りかかった。サルはルイズから離れ、ルイズはアイルランド系のマコート先生に目で助けを求めるが、先生は何ともしようがない。アイルランド人はうしろから殴りかかる、とサルは民族非難をし、マコ

ート先生のクラスからアイルランド系でない先生のクラスに替えてくれとガイダンス・カウンセラーに頼む。卒業間近である。マコート先生は、ほかの教師たちのようにホールで慰めることができない。サルの肩を抱いてなだめ論してルイズのもとに戻すことも、ルイズにほかにも男はいるよ、などと慰めることもできない。どちらをしても、へまをしまいそうだから、というのがその理由である。

しつけ、子育てで暴力的な父親、多様な民族的バックグラウンドと生徒たちの対立というニューヨークの公立高校の現実が記述されている。その中で、教師、マコート先生は、生徒の SOS に充分に応えられない。子どもは親のありようや文化を環境として持っており、子どもの行動にはどうしてもそれらの影響が見られる。暴力でしつけるのは間違いだ、と親に説教することもできなければ、父親の暴力を途中でストップさせて父子をともに穏やかな生活に「善導」することもできない。子どもたちには、民族の違いを乗り越えて結婚し、互いの文化を理解し継承するよりよい未来が期待できるが、マコート先生は、逆行が食い止められない。ああ言ってもこう言ってもウソになる気がする。口先だけの慰めの気がする。先生は、誠実で正直でシャイで、分をわきまえすぎるほどわきまえていて、「今は何もしないのがいちばんだ。いつか、ホールで生徒の肩に腕を回して、優しい言葉をかけて抱きしめるだろうけれど」（95）と思う。

ここで、教員の「義務」や「仕事」の範囲が問題にされるかも知れない。しかし、そもそも「高校教師」が生徒のどのような問題、親のどんな要求に応える存在であるべきか、あるいは、どのように応えるべきかは、時と場所で異なる。理想の姿にも対処法にも、時代や文化でいろいろあろうということは、誰もが承知しているはずだ。ところが、上記2例を読むと、マコート先生にはがゆさを覚えたり、教員として十分な教育力を持たないのではないかと疑ったりする人もいそうである。そこで、1960-80年代のマンハッタンの公立高校での教育を、客観的、統計的、歴史的に踏まえて「批判」や「評価」をすることも必要になるだろう。ともすれば、ある時期、ある場所の物語、挿話、記述を読むのに、読者は、背景抜きに、倫理的、社会的等の「批判」や「評価」を下そうとしがちなのである。しかも、批判や評価の「基準」、「根拠」は、ともすれば、自らの文化的、歴史的、社会的等の背景から築いたものでありがちである。学校のできごと、行動を描いた物語は、読者の読書時点での知識や文化的背景に基づいて「評価」「批判」される恐れがあるということだ。この作品が「単なる記録」、「実践記録」ではないと思えば、態度も変わってくるかも知れない。しかし、「思い出の記」、さらには「ノンフィクショ

ン」、あるいは「実話に基づいた小説」だと考えると、先生のとった行動にいつそ厳しい目を向ける人も出てくるだろう。つまり、生徒の置かれている状況の問題、生徒のありよう、教員の置かれている状況の問題、教員のありようのうち、教員のありようがいちばん、注意がいくタイプの批評を呼ぶ可能性があるということである。これは、教育現場を扱ったものを、いわばケーススタディととらえてしまい、教育には「正解」があると前提して、この問題にはこう対処するのが正解と、いわばパターン化し、マニュアル化して覚えていなければいられない不安な「教育家」や「親」たちが陥る解釈法・批評法である。しかし、もういちど、教員の義務、生徒への対応の方法は、実は、文化、時代等に左右され、干渉され、影響を受け、あるいは規定されつつ適用が図られて、時々刻々変化しもある、ということ踏まえて批評することが大切だという、明確な原則を思い出して読み直そう。

さて、そこに、3つ目の挿話、ケヴィン・ダンに関する物語が出てくる。オーギーについては約1ページ、サルについては約3ページが費やされているが、ケヴィンについては、約5ページが割かれている。それだけ、ケヴィンの何かのマコートの心をとらえたと考えられる。

3.『先生よお』第7章(2):ケヴィンの挿話

ケヴィン・ダンは名前もアイリッシュなら、たいへんな赤毛、そばかすの「典型的なアイリッシュ」で、19歳でまだ、卒業せずに(できずに)高校に通って来ていた。他の先輩教員たちは受け入れを「拒否」しているのだから、新入りのマコート先生に押し付けられた生徒である。ケヴィンの問題は、ことばのレベルで、ああ言えばこう言う、聞き分けがよくない、指示に素直に従わないでつべこべ言う、という「めんどうな」「直しようのない」生徒、ということである。‘The kid is just a royal pain in the ass, troublemaker, out of control.’と記されている(95)。「手におえない」「やっかいな」存在だという。さらに、‘That kid belongs in a zoo, monkey section, not a school.’(95)という極端に貶める評価が連ねられている。これが、先輩教員たちのケヴィンへのレッテルであった。「学校にいることのできる人間」というものではなく、「動物園の猿」だ、というのである。

配属されたケヴィンは、マコート先生のクラスには、ひとりでは行かない。ガイダンス・オフィスで先生が迎えに来るのを待っている。先生が迎えに来たのでガイダンス・カウンセラーがうながしても、あいさつもせず、フードをかぶったままでも続ける。カウンセラーはあきらめて、先生と行くようにと許す。

以下、ケヴィンの「ケーススタディ」としてではなく、その行動とことばが、記録ではなく思い出されて記され

ている。

ケヴィンは容貌だけでなく、気質も、典型的という以上に極端な「アイルランド人」に見える。がんで御しがたくて疑り深く、そのくせ、おかしなとき・方向に義理堅い。教師の命令・指示・期待には、素直に・おとなしく・聞き分けよく・常識的に・礼儀正しく従うことはしない。新しいクラスにひとりで行かず、教師が迎えに来るようにさせる。つまり、甘えがあるかプライドが高い。自分への声のかけ方が気に入らないとからむ。

しかし、マコートはこれだけの「現象」をとらえて記述しているだけではない。教師に迎えに来させるのは、実は、途中でエスケープされるのを「学校当局」が困るのでつかまえているのである。「社会」がケヴィンを何らかの囲いの中に入れ、送っていく仕組みがあることを、マコートはオブラートに包んで書き込んでいる。ケヴィンの扱いを決めるのは「学校」あるいは「ガイダンス・カウンセラー」という社会組織である。ケヴィンではない。1教員のマコート先生ではない。そして、そのアメリカという組織は、ひとつはケヴィンを、次のように新人のマコート先生に押し付ける理由づけをする。

... the kid is Irish, and surely an Irish teacher with a genuine brogue can handle the little bastard. Guidance counselor says he is counting on something, you know, atavistic, something that might strike a chord. A real Irish teacher could surely stir something ethnic in Kevin's genes. Right? (95)

(やつはアイリッシュなんだ、で、きっと、本物のアイルランドなまりのアイリッシュの教師が、あのちび野郎を扱えるのさ。とガイダンス・カウンセラーが言う。私は、何か、ねえ、先祖がえり的なもの、コードを思い出させるようなものを期待してるんだよ。本物のアイリッシュの教師ならきっと、ケヴィンの遺伝子の中の何かエスニックなものをかきたてられるだろうにとね。そうだろうか?)

善意、好意、無垢、世話好きだけではやりおおせないガイダンス・カウンセラーの仕事が推測できる、と言えるにしても、それ以上の「エスニック」な面での「差別意識」、さらには「悪意」、「侮辱」があからさまに見えるところである。このことばを吐かれたことを、ガイダンス・カウンセラーには残念ながら、記録に留めることを、マコートは忘れていない。そして、この人物には、一般名詞の役職名のみで、固有の名前が与えられていない。

さらに、ケヴィンに「マコート先生と行くんだ。そし

て、先生に協力するんだよ」と促しながらガイダンス・カウンセラーがマコート先生にささやいたのは、‘He might, you know, identify with you a little.’(96) ということばであった。これに対してマコートは、‘He identifies with nothing.’(96) と記す。あるいは、あとで振り返って、ケヴィンは何ものにも自己同一化していなかった、と結論づけている。いったん、ガイダンス・カウンセラーのことばを字義通りに、また、侮辱を感じずに受け取って、とまどいながらもケヴィンを引き受けた新人教師の質朴さが伝わる。しかし、すぐそのことばを裏切って、ケヴィンがそうそうマコート先生にすぐに従ってガイダンス・ルームを出なかった、という事実を伝えることばとなっているのである。ちょうど部屋に首をつっこんで来た校長が、「フードをおろしなさい」と言ってもその生徒は知らん顔をしている、つまり、校長の言うことを聞かないので、「しつけの問題のある生徒なのかな？」とマコート先生に尋ねるが、「ケヴィン・ダンです」と先生が答えると、「あー」と言うだけで首を引っ込めて行ったことから、ケヴィンの学校での評判が明らかになる。次の段落冒頭の「ケヴィンは何ものにも同一化をしていない」という記述は、執筆時期のもので、体験時からずいぶん時を経たのちだから書けた評言だろう。ケヴィンの本質をつく判断のことばで、マコートの長年の苦難、差別との忍耐強い闘いから得られた強さ、したたかさがうかがい知れる。つまり、アイルランド人であるとかないとかは、ケヴィンには実は関係がなかった、という認識である。こうして、ガイダンス・カウンセラー（という装置かつ一般）の認識のゆがみ、こじつけ、偏見と差別を、さらりと記述しているのである。

マコート先生が先輩教師に聞いて次第にわかったのは、ケヴィンは、‘impossible cases’(96) のひとつで、ガイダンス・カウンセラーに言わせれば ‘Kevin is trouble but he’s dysfunctional and won’t be around long.’(96) ということであった。「症例」で「機能障害」であると名づけられていたということだ。ここで、教育学、教育心理学、心理学等の専門家であれば、ケヴィンを「おもしろい」「ケーススタディ」のひとつにして、症状、対症法検討などを学問的に行ったところであろう。しかし、マコート先生（とマコート）は、「分類」に落ち着かない。「レッテル」で安堵しない。最も特徴的なことは、彼がケヴィンを「研究対象」にしていない点である。ケヴィンのことばと行動を、批評も分類も分析も加えない形で、「写生」している点である。そうすることで、ケヴィンを「片づけられない」のである。

先輩教師たちに「教育不可能」、ガイダンス・カウンセラーに「機能障害につき特別教育学校に適合」と「分類」されているケヴィンに対して、受け入れ(させられ)

たマコート先生がしたのは、精一杯、気を悪くさせないで、なだめながら、教室を平穩に保つ努力だった。一方で、マコートの作家性がケヴィンのことば集を編んでいる。これは、ケヴィンがともすればクラスの注意をそらしてしまった‘irrelevant remarks’(96) 集で、ケヴィンの思考と言語の具体的なありようを披露するものになっている。たとえば、「左足に右の靴を、右足に左の靴を履けば脳をより強力なものにするから、できる子どもみんな、双子になる」といった発言だった。特に‘beans’ と ‘fart’ と幼児について執拗に述べて、「幼児に豆を食べさせておならを出させれば、誘拐されても豆のおならのわかる訓練を受けた犬に見つけられるから、僕は高校を出たら豆を食べた子どもが出すおならのわかる犬の訓練業をして新聞やテレビに出る」と将来の夢を語ったという。

ケヴィンの家族についても記している。オープン・スクール・デーにやって来た母親の話から、「常識からずれた」家族だとわかる。ケヴィンが4歳のときに出て行った父親は、実験用の白ハツカネズミを飼育する女性と暮らしている。母親は、息子が軍隊に入り、ヴェトナムに行くのではないか、「モップのような赤毛で弾的になる」のではないかと心配する。マコート先生の慰めのことば、「軍隊は彼を連れては行かないと思いますよ」というのに気を悪くする。「あの子はこの学校のどの子にも負けぬ、いい子なのよ。父親は大学に1年行った人で、新聞だって読んでたんだから」と反論する。そこに、息子のルーツを感じさせる「論理のずれ」が読み取れる。「軍隊向きのタイプではないという意味なんです」と言って「ことばじり」を変えるマコート先生に、何でも向いてるのよ、「私のケヴィンは何だってできます」と主張する。息子を軍隊がほしがらないとかできないことがあるとか言うとは、プライドを傷つけられた、と怒っているのである。「息子をみくびっている」と無然として言う。マコートはここに、ケヴィンの「理屈」の「ねじれ」、「ずれていく論理」と同じ流れが見られるのを書き留めているのである。

しかし、ここで「ずれ」は、馬鹿にするために記述されているのではない。また、この親にしてこの子あり、遺伝である、という実例を掲げるために持ち出されているのではない。その点が、医学系、教育学系のケーススタディと異なる点である。現実にいる母子に、力の限り親切に対応しようとしている「教師」の奮闘ぶりが前景化されている。それによって、母子も教師もともに、限界を持った、しかし、懸命に生きている人間として、公平に、描かれている。そうして、人間のおかしさ、こっけいさがにじみ出て見えている。つまり、ユーモアがどの人物にも感じられる書き方がなされているのである。このような描き方をしていることは、原文にもどれば以

下のようにっており、明らかだ。

I tell her he's a bright boy with a lively imagination. She says, Yeah, that's fine for you, having a bright boy in class, but what about his future? She's worried he'll drift into the army and wind up in Vietnam, where he'll stand out with his mop of red hair and be a moving target for the gooks. I tell her I didn't think they'd take him in the army, and she looks offended. She says, What do you mean? He's as good as any kid in this school. (97)

自由間接話法の一つを使い、母親のことば、語り手の先生のことばをともに地の文に入れて平等化している。直接話法の記録性を失わずに、目にもさわりのない表記法で文の自在な流れを作り出している。人物の言語レベルをそのまま記述して、話されたときの雰囲気、話者と話のレベルが伝わるように工夫している。現在形の維持もあり、語彙と文法の幼さが伝わる。これによって、ユーモラスに、とぼけた感じを出し、語りの「切り口」を丸く見せている。このような書き方は、James Joyceの'The Sisters'や'Araby'や、William Faulknerの文体に通じる。使用語彙、文法と内容が合致して、テキストを堅苦しくなくして、読者に、どこのどの発達レベルの世界を描いているかをきっちりと認識なおさせてくれる。

さらに、上の一節には、鮮明な色を描き、強烈な印象をとどめさせて、あとでブラック・ユーモアだとわかる仕掛けもなされている。母親がケヴィンの赤毛がモップのよう、と形容し、その赤毛が目立って、標的になりはしないかと心配するところである。母親は、意識せずに、ケヴィンのようすを誇張、滑稽化している。母親としての心配が、そのような「予知」「妄想」「懸念」を生んだということであるが、その心配が滑稽に見えてくるのは、ブラック・ユーモアである。この時点では懸念に過ぎないこの予感に当たり、最後にケヴィンがヴェトナムで行方不明になったと母親が学校に報告に来るのであるから。

さて、ケヴィンは先生の話をおかず、無視するので、マコート先生は彼をガイダンス・カウンセラーのところに行く。カウンセラーは、ケヴィンを忙しくさせ続けていけばいい、と書いてくる。そこで、先生はケヴィンを「教室管理人」に任命する。これがきっかけで、ケヴィンは戸棚からひからびてこびりついた水彩絵の具の入ったビンが何百もあるのを見つけ、たいへんな興味を示した。先生は好きなだけビンを掃除していいよ、と言いつつ、そのための席を与える。夏休みには、この仕事ができない、家に持って帰っていいかと泣くので、いいよ、と言うと、ケヴィンは「先生は世界最高の教師だ」とほめ、'if anyone

ever gives me trouble he'll take care of them because he has ways of dealing with people who bother teachers'(99) と請け合う。

この時点で、ケヴィンは「先生」に「許可」をもらう「生徒」になっていた。この先生は課題を与えてくれた。それも、自分がこだわってやりたい課題を、好きなだけさせてくれる。休まずまじめにどこでも追究することを許してくれる。そういう先生になら、従えるのだ。確かにこれは「最高の教師」だろう。そんな先生を困らせる人間がいたら、自分が相手になってやる、とケヴィンは言うのである。しかし、その次の「理由」が、おかしみ、アイロニーを醸し出している。「先生たちを困らせる人々の扱い方を自分は知っているから」という理由である。彼がそれまでどんなにか「先生たちを困らせ」てきたかを思い出すと、苦笑を誘う。彼には困らせる本人だという自覚がないのがわかる。悪気はないのに困らせてしまうケヴィンという存在の哀しみが浮かんでくる場所である。

逆に、弱い人間、差別され、うとまれる人間への、捨てたり見放したりしきれない、いわば「愛」が先生の側にあることが感じられる。愛があっても、先生自らには救う力がない、とされていて、精一杯「つきあう」けれども、それも、あるところまでだと自分自身の限界がわかっていて、だから、その子にも先生自身にも、やるせない、切ない気持ちがしているようだ。

ケヴィンは、他の子ならさわりもしないものを、大事に宝物として持ち帰った。これをきれいにすることに夢中に没頭している。集中力があるのである。低レベル、こっけい、阿呆だと呼ばれるかも知れない。しかし、夢中になれるもの、ことを見つけれ、熱中し、それが色彩鮮烈で、不思議に目に浮かぶ形を生んだ。責任を持ってあたるこの「仕事」を与えてくれたマコート先生に、ケヴィンが心底感謝していたこと、その純情な、恩を知る人柄が、ひしひしと伝わってくる。そして、これが「教育」でなくて何であろうか、と読者に感じさせる。事実、マコート先生は、授業に行けばパンが飛び交っていたようなニューヨークの公立高校で、やがて、次々と生徒の心をとらえ、文法だけでなく、文学を染み込ませていったのだ。

ケヴィンが初めてマコート先生のクラスに来ることになったとき、ガイダンス・カウンセラーがいみじくも、次のように言っていた。

Guidance counselor says Kevin is going on nineteen and should be graduating this year but after being kept back two years there is no chance he'll ever wear cap and gown. No chance at all. The school is playing a

waiting game, hoping he'll drop out, join the army or something. They'll take anyone in the army these days, the lame, the halt, the blind, the Kevins of the world. (95)

「学校当局は待機戦術をとっているんだ」、「彼がドロップ・アウトすることを期待しているんだ」、「軍隊かなにかに入ることを」とガイダンス・カウンセラーは言ったという。マコート先生に、腹を割って思っていることを述べたのか。それとも、きれいごとではなくてこれが公立学校のひとつの現実だ、と新米教師に教えているのか。あるいは、学校当局の冷たさを皮肉に語っているのか。次の「このごろは軍隊に誰でも入れるんだよ、……世の中のケヴィンたちをさ」ということばは、差別語に満ちている。つまり、このガイダンス・カウンセラーがケヴィンに同情的ではないこと、軍隊の最近の見境ないリクルートには感心していないこと、ガイダンス・カウンセラーが生徒の最終責任者ではないこと、彼が差別的な人物であるということ、ケヴィンの扱いつまり時間が来たら学校から出て行って軍隊にというコースをたどらせることを必ずしも感心していないことがわかるだろう。

同時に、ここは、ケヴィンの行く末の予告、伏線となっていた。ケヴィンが軍隊に導かれ、やがてヴェトナムに送られ、死んでしまって学校当局や社会の厄介払いとされる運命が、2回、不吉な予告をされていたのである。まず、この最初のガイダンス・カウンセラーの予感、次が母親の不安な予感であった。

すでに述べたように、母親の心配の通りになる。夏休みのあと、ケヴィンはもう、マコート先生のクラスには帰って来ない。「教育局のガイダンスの人たち」に「手におえない子供たちのための特別学校 (a special school for incorrigibles)」に送られ、父親のもとに逃げて車庫で暮らし、軍隊にとられ、ヴェトナムで行方不明になったと母親が先生に報告に来た。母親は、息子を持つことに何の意味があったのか、誰も知らない所に送られ、ずたずたに吹き飛ばされて指さえ埋められないとは、と先生に言う。「ひとつ終わればまた別の戦争が始まる」と、まさに反戦のことばを口にするのであった。

ケヴィンは何も残さないわけではなかった。母親のことば、記憶、伝言と、写真の中のガラス瓶で書いた‘MCCORT OK’という文字、そして、漬物瓶を残していたのだ。漬物瓶には、ケヴィンの赤毛が絵の具と混ぜ合わせてあった。つまり、遺品だった。母親は、ケヴィンがそれを先生に持ってほしいと思う、と置いていく。先生が机の上に瓶を置くと、ケヴィンの髪で白熱光が見える。光る塊を見ると、先生は、ケヴィンを学校から出したこと、ヴェトナムにやってしまったやり方を、「す

まない」と感じた。同情的でもなかったであろうクラスメートの「とくに女の子たち」が、ケヴィンの瓶を「芸術作品」だとほめる。「美しい」、「たいへん労力が要ったに違いない」と認める (99)。そのことばに先生がケヴィンのこと、つまり、ヴェトナムで行方不明になったことを語ると、女の子たちの何人かが泣いたという。ケヴィンがなつかしく思い出されたこと、つまり、語られたこと、美しいものを残したこと、つまり、芸術作品を残したこと、そして (多分) 死 (行方不明は当時は死を予想させたらうから) に涙を流されたこと、つまり、惜しまれたこと、の3点で、ケヴィンの生が無意味ではなかったことが証明された。そのことを、マコート先生は記述 (敢えて記録とは言わない) にとどめている。

しかもまた、先生の心のうちが語られてもいる。「正直に言って、私は息子さんにほとんど何もしていません。ケヴィンは魂の迷子 (a lost soul) で、私は彼のことを充分にはわからず、愛情を示すには私は内気すぎました」と母親に言えただろうに言えなかった、と記している。マコートは、思い (内言) はことば (外言) の何倍もありうる、ということを示してくれている。それに、口にするこことばが思いをそのまま伝えることがないこともあるし、思うこと (認識) が真実 (認識にまでのぼらせていない部分を含んだ事実) を語らないこともあるという「真実」を、そっと伝えていると言えるだろう。「ケヴィンとお母さんに感謝されるほどのことはしていません。ケヴィンはどこに魂が行ってるのかわからないような子で、彼の気持ちはどこでどうなっているのか、私には充分にはわからなかったのです。それでも私は彼に愛情を感じましたが、そのことを彼に表現する、つまり、口に出したりボディ・ランゲージとして抱きしめたりするには至りませんでした。私が内気だったから、というのは半分本当で、半分、うそです。困った生徒だなあと半分、思っていたのが正直なところなのですから。でも、困っていたとは言えません。だから、今言った (ほんとは口にはしていない) ことばが全部、言えません。」というのが、マコートの頭の中で一瞬、よぎった思いだったとわかる。そして、それを、当時、その場で語らず、今、この著作の中で「告白」しているのが、マコートの「良心」であり、また、小説家魂である。なぜなら、整理し、芸術的効果もはかりながら「現実」の「人間の心と行動をありのまま書きつける」のが「小説」だという考えがあるからである。

ケヴィンの瓶は、もう一つの「現実」を記すことで、「客観視」されていく。教室の保守点検係がこの瓶を「ただのくず」と思い、ごみ捨て場に持って行ってしまったというのである。つまり、「芸術品」としての地位の持てるものではなかったことを明らかにしている。これを

記すのは、マコートの「乾いた諦念」、現実への乾いた目を示す。あまりにも悲惨な体験を超えてきた者の持つ、同情やセンチメンタルな甘さへの淡々とした冷静、客観的な視線を現している。その目は、書く者に、現実のありようを、飾らず、隠さず記すことを要求する。

マコートの作品には、誇張、強調、リズム、歯切れの良い語り口、極端な人、常識はずれた人、典型的な人物等がもたらす、愉快でこっけいでウィットに富む側面と、弱い人間、哀しい現実が伝えるペーソス、アイロニーの側面が混合している。

ケヴィンのことをマコート先生が同僚に話すと、「Too bad」で気の毒至極だが、教員たちは大人数をかかえているし、心理学者じゃないし、滑り落ちる子をどうしようもないよ」(100)と慰め、あるいは、弁解するだけだった。先生も、どうしようもない、と思っているのだろう。人生には、どうしようもないことが多すぎるくらいある。でも、努力できることはして、自分のできる範囲で、正直に、善意で、自分にできるだけ教育しようと考えていたようだ。

しかし、30年間公立高校とカレッジで教員をしたあとで、マコートはそれだけで人生を終われないと気付いた。書くことを教えてきた人が、書く仕事をする。それも、書きたい題材が、書いてくれとせまっていたからだ。これを書かずに死ねないと思い『アンジェラの灰』を書いた。19歳までの自伝だった。それからその続編『ですね』を書いた。19歳でアメリカに単身、戻ってきて苦難のちに教員になり、母の遺灰を故郷に埋葬するまでを追想した。さらに「教師についてもっと書かなくては」と思って(『先生よお』の「プロローグ」でもテレビのインタビューでも、そう語っている)、自らの教師経験で出会った数々のこと、人々、生徒たち、教室風景を描くことにした。それでできあがったのがこの『先生よお』である。ケヴィンの「問題」は、極端なケース、教育困難な生徒の典型であるだけでなく、長い人生を歩んできた作者が見たアメリカの「問題」を映す「例証」として提示されていることを、見逃してはならない。

4. 額縁から絵を眺める：

ケヴィンの挿話とマコートの体制批判

めんどろな若者といえども母の息子であるが、誰かれかまわずに軍隊に入れ、誰も知らない国で死なせて社会としては厄介払いをしている国。次から次へと戦争をしつづける国。そういうアメリカに、マコートがやりきれなさ、疑問を感じていることが、ケヴィンのベトナム戦参加を漸増的に描くことでにじみ出ている。はじめはガイダンス・カウンセラーの予感が語られ、次に母親の予感がなけば取り越し苦労となるかも知れないと思わせ

ながら語られ、最後に、それらが的中したことが報告されているのである。

マコートは、声高に反戦を唱えはしない。ただベトナム戦争の「本当の意味」を、文章に密やかに開示している。先生は、ケヴィンがやがて「軍隊にとられ」、「ベトナムにやられる」だろうと、ケヴィンの母親のように予感してはいた。アメリカ軍は「人間ではなく猿」を集めて、死んでもいいから送り込む「システム」であることを、先生はそっと知っていたのだ。それでも、ケヴィンの母親から、男の子を持ったら、知らない国へ、戦争へ、「共産主義者」(ベトナム戦争は北ベトナムと南ベトナムの戦い。北は、ソ連や中国など共産主義国に支援されていた。アメリカはベトナムの共産主義化を食い止めるという大義名分で南を支援し、長い年月にわたって大量に軍隊と兵器を送り込んでいたから)に息子を捕られる、とまさに反戦のことばが聞かれた時、むずかしいシステム論は語らない。アメリカの体制批判や戦争非難はしない。

マコートの訴え方は、もっと穏やかだ。ケヴィンの髪の毛が瓶の中で白熱光を放って光るのを見ると、「彼を学校から押し出され、ベトナムにやらせるのを許した私のやり方 (the way I let him drift out of the school and off to Vietnam)」をすまないと感じた、と記しているのである。どれくらい深く、長く悔いたかは問うまい。マコート自身が、朝鮮戦争のさいに軍隊に入れられ、しかし、その兵役のおかげで、繰り返し語るコンプレックスと誇りの源となった「高校も出ていないのに」大学に入って単位をとることができたことを、彼は忘れられないのである。やがて、努力に努力を重ねて高校教師になって社会を這い上がることができたこと、アメリカに家族を呼び寄せることができるようになった大きなきっかけが従軍歴であったことを、自伝3部作の2部で書いている。

「おかげ」を忘れないから、「戦争を必要とする政治経済構造」という「不都合な真実」を声高に明快に「暴露」したり「非難」したりしない。それでも、彼のことばで言う‘the way’に対する異議、そういう「構造」、「仕組み」、「システム」の存在の可視化は、しっかりと書き込んでいるのである。そこに、マコートの「複眼性」が見られると言えるだろう。ただ無力で何もできない教師であったのではなく、ケヴィンを書き、すまなかったと書き、時代と社会のありようを記すことで、体制の動きへの警鐘になっていることを、ボールを投げられた側の読者は、見落としてはならないだろう。

以上で、マコートが、常識を超えた生徒と親とおろおろする教師の姿をおもしろく描きながら、実は複眼を持ってシステムの問題をも描いていることを指摘した。

このことは、第1章から18章まで(といっても、第18

章は第17章の最後にある‘Someone calls, Hey, Mr. McCourt, you should write a book.’(257)を受けた‘I’ll try.’(258)という1文だけなのであるが。)にかぶせた‘Prologue’(1-7)から眺めなおすと、より明らかになる。

「プロローグ」でマコートは、「みじめな子ども時代」を自らのあらゆる苦難のもとだと断じている。そして、なぜそんなみじめな子ども時代になったのかには、原因となった人間がいた、と言う。大胆に、具体的に責任者の名前を挙げている。当時の教皇、司教、イングランドのジョージ6世、イーモン・デ・ヴァレラなどのせいで「もたらされた」人為的なものだ、と断定しているのである。また、カトリックの司祭たち、教師たちが、地獄、煉獄、鞭で子どもをおどしてたたいてきたのは間違いだった、と判断を述べている。つまり、マコートには、子どもを不幸にする組織的ないわば暴力的な機構が存在する、あるいは、存在した、という認識があるのがわかる。ずばりと断定するこの「プロローグ」の口調の厳しさと第7章のやわな教師の描き方には、はっきりと差異がある。第7章の描写を「プロローグ」の額縁と合わせて眺めることで、第7章のとぼけた雰囲気の話りの内容に、鋭い批判の精神が潜んでいることが推測されるのではないだろうか。

悲惨な子ども時代があり、アイルランドで高校も出ていないのに、ニューヨークの公立高校の教員になれて30年も教師をやれたのは、ほんとうによくやった、と自分をほめる。一方、教師人生をふり返り、自らの「馬鹿さ、臆病、ためらい」を嘆いてもいる。批判精神を持ちながら、あからさまに対抗、闘争しないように生きてきたことに、いくらか残念な気もするということだが、さらに、良心、罪の点検をしてきたことを良しと認める。何よりも、自分の美德は「がんばり (doggedness)」にあり(2)、と自認する。

本書『先生よお』は、退職後の66歳で出した『アンジェラの灰』が何年にもわたるベスト・セラーになり、やがて有名監督が引き受け有名俳優たちが演じるハリウッド映画になって、成功を取めたあとに書かれたものだった。それも、『アンジェラの灰』の続編も出したあとである。ピューリッツァー賞受賞のノンフィクション作家として、次は何を書くのだろうかと待たれている中で準備した。教師はもっと評価されるべきだ、という信念を持って、その仕事のたいへんさを世間に知らしめる目的を掲げていた。教師だって、ハリウッドで俳優たちに囲まれて、ほめたたえられることがあっていいし、大統領に会って賞賛されることがあっていい、と言う。もちろん、そういうことが現に自分の身に起こったということ、本書を読む読者は知っているのだ。この上は、教師という存在が、もう少し理解されるようにしたい、とい

うのが、マコートの執筆意図だった。

5. ジェイムズ・ジョイス作品を踏まえて

マコートは、この「回想の記」を、単なる記録としてではなく、「本」、つまり、読み物として書いた。「今度はあなたが書いたらいかがですか」ということばは、Samuel Butler がニュージーランドを後にして作家になるきっかけになったことばでもあった。サミュエル・バトラーは *Erewhon* (『エレフォン』)(1872年刊) という架空旅行記と *The Way of All Flesh* (『万人の道』)(1904年刊) といういわば教養小説を、自らの体験をもとにして書いた。後者はジョイスの *A Portrait of the Artist as a Young Man* (『若い芸術家の肖像』。以下、『肖像』と略記する) に書き方の基本が継承されることになる。ふり返ってマコートは、『アンジェラの灰』、『ですぬ』、そして『先生よお』という自伝(的小説)三部作を、大西洋を歩き来した自らの体験をもとにして書いたのである。その点で、マコートの自伝三部作は、「英文学」(ブリテンの文学)の伝統に従っている。

『アンジェラの灰』は「父と母」から始まり、3ページ目はフランク・マコートが小さいころの思い出の場面で、父親の歌が記されている。そして、最後は第18章の終わりの‘Isn’t this a great country altogether?’(363)を受ける第19章で、ただ‘’Tis’(364)とだけ書かれている。新大陸アメリカを目の前にして感動と夢に胸を膨らませる主人公を描いているわけである。この始まりと終わりは、ジェイムズ・ジョイスの『肖像』を踏まえていることが明らかだ。また、最後の2章の作り方は、同じくジョイスの *Finnegans Wake* (『フィネガンズ・ウェイク』) に示唆を受けたとも見られる。

ジョイスの影響は、至る所に見いだせると言っても過言ではないだろう。話法の実験がなされていることもそのひとつである。自由間接話法、間接話法、アイルランド話法などがうまく取り入れられていて、生き活きとした話りの流れを伝えている。

ジョイスの影響を感じさせることは、『アンジェラの灰』の1999年 Flamingo 版のカバーにも掲載されている Mark Karr の指摘にもある。「フランク・マコートの叙情的なアイルランドの声はジョイスと比較されるだろう」という指摘である。特にジョイスの『ユリシーズ』の影響も注目したい。

よく読めば、アイルランド人への偏見に満ちたガイダンス・カウンセラーは、叙情的どころか、『ユリシーズ』第2挿話の Mr Deasy (ディージー校長) を思い出させるだろう。ディージー校長はステイーヴンに、アイルランドにはユダヤ人がいない、といった間違った認識で、ユダヤ人差別を口にした。ディージー校長もガイダンス

・カウンセラーも、偏見で視野が狭くなっている。片方はアイルランドに口蹄疫を持ってこさせないためにいかにしたらよいかを新聞に投稿しようとしている。もう片方は、結局、勤務校において変わり種のアイルランド人できるだけ隔離し、排除したがつているのである。

フランク・マコート自身は、ジョイスよりはオリバー・セント・ジョン・ゴガティにもっと影響を受けたと言うだろう。『先生よお』の第8章によれば、マコートの修論はゴガティ論だった。しかし、ジョイスの『肖像』を踏まえていることが明らかな『アンジェラの灰』は、『先生よお』の「プロローグ」からすると、『若き教師の肖像』として読むことがマコートの本望であるかも知れないと気付かされる。そして、『ですね』の旋律は、ジョイスが『ユリシーズ』で描くバック・マリガン(モデルはゴガティ)のことと同様であって、大胆で冗談がいっぱいで笑いにあふれ、猥雑で遊びに満ちて詩的である。

6. マコートとジョイスの相違

フランク・マコートの『アンジェラの灰』の最後は、ジェームズ・ジョイスの『ダブリンの人びと』に出てくる少年たちの物語の続編にも読める、と言え、異論が出てくるかもしれない。しかし、アイルランドで食べられなくなり、仕事も将来も見えず、19歳になって、「イーヴリン」と同じように船でアイルランドを脱出しようとしている話である。『アンジェラの灰』が、特にアメリカのアイルランド系移民2世にたいへんな感動、歓迎を受けたというのは、父親たちの苦難の「歴史」を、この「自伝(的小説)」がまさに「象徴」しているからにはかならない。そういう意味で、『アンジェラの灰』の「ぼく」は、『肖像』のステイヴン・ディーダラス、そして、さかのぼって、まだ飛ぶ前の「姉妹たち」や「アラビー」の「ぼく」に重なるものを持っていると言えるだろう。

さらに、マコートが「実話」として提示していることから、マコートの三部作は、彼がニューヨークの5つの公立高校、1つのカレッジで30年間教師を、それも、英語教師をしたという事実立脚していることを、読者は承知して読む。つまり、貧しさ極まりないアイルランドから飛び出して(というより、船出して)、夢を持って「新大陸」アメリカ、それも大都会のニューヨークにちゃんとたどり着いて、父親とは違い、そのままがんばりにがんばりを重ねて、学歴の無さを克服して、教師になるという成功、それも、カレッジや優秀校の誉れ高い高校の教師(それも、くりかえすがイングリッシュ語=ブリテンの「国語」の教師)になるという「成功」を取めたこと、すなわち、アメリカン・ドリームが実現した「実

話」として読む。

アイルランドのカトリック教徒の現実だったという『アンジェラの灰』の「ぼく」が、笑うしかないほど貧しくてみじめで悲惨で、だからしたたかに生きていくしかなかったと、この本を読めば理解できる。本の最後で、死にゆく強欲な老婆の献金や財布の中身や持ち物をちよるまかそうと、「ねずみ小僧」か「ロビン・フッド」の小型版だと思って許せる。そういう「赦し」の根拠を、マコートの三部作は与えている。ドストエフスキーの『罪と罰』をしっかりと読んだことのある作者の手になる三部作は、読者への理解と赦しの要求書であると言えるだろう。

いっぽう、前述のように、『先生よお』の「プロローグ」で、作者はこう書いている。

I could lay blame. The miserable childhood doesn't simply happen. It is brought about. There are dark forces. If I am to lay blame it is in a spirit of forgiveness. Therefore, I forgive the following: Pope Pius XII; the English in general and King George VI in particular (1-2)

赦免は神の業、神父の特権であつたらう。しかし、マコートは連綿と名を挙げて、「私は赦す」と宣言している。つまり、裁く側を反転して裁かれる側に立たせるのである。しかも、そこで止まらない。次の段落で彼は、「私は私自身を赦すことさえできる」と高らかに言う。絶えず良心に照らして罪を点検してきたし、何よりも、がんばってきたのだから、と。

そこで、三部作は、マコート自己弁護の書にもなっている。『先生よお』は、教師として何をなし、何がなせなかったか、どういう生徒を相手にして、どのような効果を生み、どう対応不能だったかの告白録、弁明書、そして、自己肯定書である。教師は苦難や罪や被差別や協働や勉強や、その他、多くの人生の苦勞と楽しみを経て生きている、まさに、生身の人間なのだ。そして、その並大抵ではない努力は、理解と、できれば、医者や弁護士、將軍などと同様、賞賛を得てもいいのではないか、というのが、マコートの主張である。

一見、ジェームズ・ジョイスの作品群と相違がないように見えるが、マコートの本は、このような観点から書いているとはっきりと明示している「自伝」であるという点で、実は大きな違いがあるのではなからうか。ジョイスは、どの作品にも、明らかに自らの姿、体験、思考、感情などを書き込んでいる。明確にモデルを持つ登場人物が数多い。地名、家屋、商店、公共施設など、実際にあった物をそのまま「場所」に使っている。時間、年月

日も、かなり正確に、ジョイス自身の生きた現実の時期に対応して記述されている。執筆意図、興味が、「記録」や「ケーススタディの症例提示」などの方向にはなかったことも、ふたりは共通している。しかし、ジョイスは「理解されたい」という意図よりは、一作、一作、「進行中の作品」として、「言語芸術実験」に邁進していたという点で、決定的にマコートと異なるのである。

そこで、マコートの、書き方におけるかなりの文法的努力、文章規範から進んだ書き方のいわば「実験的」変化にもかかわらず、むしろ「活き活きと読める文章」とジョイスの『ユリシーズ』第2章の「内的独白」入りの文章を対比してみると、同じ「教室場面」でありながら、これほどまでに違うのかと驚かされる。マコートは、前述のように、アイルランド人差別、上位者の傲慢、若者を戦争に送り続ける国家システムの流れのうさんくささを書き込んでいる。それも、微妙にやわらげて、「赦し」の眼差しを浸透させて、抑えて。恐らくは「遺伝的な障害」を持った少年のようす、言語を、診断せず現象的に書き留めている。笑う一歩手前で困惑し、問題化の一歩手前で声を上げることを控え、心に思うが外に口にせず、ほんの少々の皮肉と簡潔にするための誇張をまぜて、ペースが伝わるように書いている。

7.『ユリシーズ』第2挿話のステイーヴンとサージャント

ジョイスの『ユリシーズ』第2挿話のサージャントのくだりは、次のように始まる。

Sargent who alone had lingered came forward slowly, showing an open copybook. His thick hair and scraggy neck gave witness of unreadiness and through his misty glasses weak eyes looked up pleading. On his cheek, dull and bloodless, a soft stain of ink lay, dateshaped, recent and damp as a snail's bed.

....

Stephen touched the edges of the book. Futility.

....

Ugly and futile: lean neck and thick hair and a stain of ink, a snail's bed. Yet someone had loved him, borne him in her arms and in her heart. But for her the race of the world would have trampled him underfoot, a squashed boneless snail. She had loved his weak watery blood drained from her own. (U2. 123-143)

「ゆっくりと」した動き、「濃い」髪の毛、「やせこけた」首が、「レディネス」ができていないことの「証明」

だと「語り手」が述べている。「霞んだ」眼鏡ごしに「弱い」目が「懇願して」教師を見上げている、と続けている。さらに、ほほは「さえない」「血色の無い」もので、そのほほに「カタツムリの寝床」のように湿っぽいインクの「やわらかい」しみがひとつ、ついている、と言う。インクのしみの形は、‘dateshaped’ であるとも言う。丸谷オオ・高松雄一らによれば「ナツメヤシの実」の形、つまり、丸いしみだった。

サージャントのようすを語る目は、冷静だが客観的ではない。のろのろとした動きは「鈍さ」や「運動能力の低下」の「証明」か「用意不足」の「証明」であろうが、髪が濃くても首がやせていても、その証明ではないからだ。眼鏡が霞んでいるのは6月16日（『ユリシーズ』はこの日に設定されていることが、ほかの箇所でもわかっている）で汗ばんでいるからだろう。ほほが青白いのを「血色が悪い」というだけに止めず ‘dull’ と形容したのは、語り手のサージャントへの感情を映している。さらに、ほほにインクのしみがついているのは、いよいよ愚かに見えるということだが、インクのしみの湿度から、さっきついたものだ、と「観察」して「推測」し、「カタツムリの寝床」を連想するのは語り手の恋意性を表す。サージャントの動きの形容からカタツムリを連想し、しみの湿度とかたつむりのねばねば感を関連付け、さらに、次の段落に出てくる母親との関連から「寝床」を早出ししているのである。もちろん、サージャントへの愛情は感じられない。逆に、「語り手」が「存在」していることを認識させる。

この「語り手」はステイーヴン・ディーダラスという若い非常勤講師で、たぶん、『肖像』の主人公と同一人物と思われる。名前が同じだからだ。ということは、「芸術家」になることを夢見て、鳥人ダイダロスの名にあやかかってアイルランドから「飛んだ」が、ダイダロスの息子のイカロスのように落下してしまった、つまり、夢を実現できずにパリから帰ってきた人物である。この1904年6月16日、ドーキー近くの中高等学校で非常勤の教師をしている。教えているのは古代ヨーロッパ、ローマの歴史。イングランドの代表的詩人ミルトンの詩も暗唱させている。教えながら、頭の中ではどんどん別の想念が浮かんでいて、思考が言語化されて記述されている。その思考は、生徒たちからは遠い。教師をしているのは、ただ金銭を得るため、食べるためであるらしい。教えることは彼には夢の実現ではなく、楽しくもなく、出会う生徒たちに興味もない。教育対象への冷淡、疎外する心的態度が明らかだ。彼にとって「歴史は悪夢」(U2. 377)であり、もっと価値があるのは、悪夢から醒めて可能性を生きること、言い換えれば芸術を創り出すことだったから、歴史を教えることも征服国イングランドの英語詩

を教えることも、課された重荷であったろう。ましてや、征服民の言語をもってしか、自分の思いを語れなくなっているアイルランド人である。自意識が強いだけに、ひとことひとことに、この言語は征服者に強いられた言語、という認識が働いていた。

生徒の側でも、返事すべてに‘sir’とつけながら、心は窓の外に向きがちで、スティーヴンの授業時間が終わるのを待ちかねている。イングランドの国家スポーツのホッケーが呼んでいた。脳の筋肉を要求する「システムとしての教育」の時間をなんとかやり過ごして、明るいうちに出て、身体の筋肉を使うほうが楽しみなのである。

Sargent という姓は古くはフランスにまで起源をさかのぼれる servant を表す。これがやがてイングランドに渡り、イングランド系、アングロ・サクソン系のものとなった名前であり、かつ、Sargeant、Sergeant (軍曹) などと同じルーツと知ると (www.surnamedb.com/Surname/Sargent. Web. 11 Jan. 2011、*Names and Surnames* 等参照)、語り手の心理的な動きが、単に生徒に疎遠な感情を持つ、消極的でありよくない教師の印、というに留まらないのではないかと推論されるだろう。多くのアイルランド人には、イングランド、イングランド製教育、イングランド人、イングランド兵に対する、深い不信感、不快感、ひいてはその支配をなんともできない屈辱感、挫折感、絶望感があるということを知れば、スティーヴンのこの場、この学校、この生徒たちへの疎遠な感覚が理解可能になり、そのようなスティーヴンの気持ちのありよう、心の内外の言語を、上に挙げた一節が、実に緻密に記述しているということが了解できるだろう。

8. 100年ののち：

マコートは「ジョイスのその後」のひとり

『アンジェラの灰』のアンジェラは作中の母親の名前で、舞台は主としてアイルランドの地方都市リムリックである。筆者が25年ほど前、8月に訪れた時も、まだ、リムリックは寒風が吹く暗く厳しい自然の中で、クロムウェルの残虐なカトリック弾圧やイングランドに裏切られた歴史を語るリムリック条約の石のことや19世紀の大飢饉や、その他、アイルランドが経てきた苦難と流してきたおびただしい血がそこそこに感じられる街だった。人々の表情は険しく、真夏にコートのにえりを立てて背を丸めて急ぐようすが脳裏に焼き付いている。『アンジェラの灰』は、この街で1930年代の極度の貧しさにあえぐ一家の、悲しみに満ちた物語で、耐えて生き延びる母親のけなげさが印象的である。ヨーロッパの「辺境」の国民の、「長い苦難の歴史」を反映するものとして、意味ある作品とされる。しかし、実のところ、現実を無心に見つめているがゆえにかえって誰をも愛で受け入れてい

るとされる語り手フランクの、無垢から感じられる「おかしみ」こそが、この作品を賞に値するものにしたのであったろう。

いっぽうジョイスは、故郷ダブリンにこだわり続け、作品の舞台はほぼすべてダブリンに置き続けた。そして、『ダブリンの人びと』も『ユリシーズ』も、「喜劇」として読むことができる。

マコートもジョイスも、直接的ではないが、アイルランド人であることで、闘いの歴史の中に生きた。マコートはアメリカ大陸、ジョイスはヨーロッパ大陸に渡って、故国アイルランドに帰って住むことはなかった。「エグザイル」であった。マコートとジョイスは、征服者の言語であるイングランド語を海外で教えることで生計をたてた。さらに、ともに、イングランド語で文学作品を書いた。文体の実験をした。ともに、作家として「成功」した。これほど類似点、共通点を持つふたりを対比して読み込むと、それぞれの特質が鮮明にあらわにもなる。控えめにユーモアをきかせながら人間の多様なおかしさを記述して読者と楽しむマコートのマエストロ的な語り手の文学に対して、ジョイスはあくまでも、語り手と語られている対象、語り方と内容、ことばとことばのはらむもの、現実と語り等々、数限りないこの世の事象について、読者を覚醒させ、意識化させ、手探りさせる。しかも、作家本人は、神のように、遍在するが逆にひとつの像にしほれない。

『ユリシーズ』の現場の時からほぼ100年後の2005年、『先生よお』が出版された。

フランク・マコートの教室で、生徒たちは、スティーヴンの教室同様に授業時間をやり過ごそうとしている。違うのは、彼ら・彼女らが、外にもたいして楽しみを持っていないという現実だ。マコートは、その現実執拗な切り込みを入れることはしていない。

マコートの「成功」、アメリカン・ドリームの実現は、スティーヴンが意識化した征服民のイングランド語を教える仕事によって成った。アイルランド人の訛りがある、アイルランド人は正しいイングランド語は教えられないからうちでは雇えない、と何度も採用を拒否されたのちの就職だった。だからこそ、ニューヨークきってのスタイヴィサント・ハイスクールのイングランド語教師、それも、最高度のクリエイティブ・ライティング教師になれたということ、さらに自伝でアメリカ文学ノンフィクション部門の最高賞をとり、ハリウッド映画化されたことをもって、マコートは「成功した」と誇れるということだ。

マコートは、シェイクスピアを、アメリカの詩人たちを、生徒たちに暗唱させた。さらに、ライティングの時には、それぞれの自伝を書かせ、自らも例として子ど

も時代の思い出を書いて読んだという。

世界が多文化化、多様化する中でも、ニューヨークはいちばん早かったから、生徒には、アジア系、ヨーロッパ系、中米系など、多様なエスニシティを持つ者が多かった。イングリッシュ語 (English) は今や、グローバリッシュ (Globalish) になりつつあるが、その言語と文学的伝統を移民 2 世、3 世に教え、言語で自らを説明する力をつけていく教師は、それぞれのルーツは踏まえながら、新たな文化的存在を産み出す「メンター」にはほかならないだろう。そういう意味で、教師兼作家のマコートは、世界中の人びとに各自の言語を意識化させ、イングリッシュ語と文学的伝統を徹底的に踏まえた上で言語革命を遂行し、かつ、読者に自らの鏡としてテキストを読ませ、それを読んで刻々と進歩させようとして作品を提示してきたという点で「偉大なる教師」だった芸術家ジョイスの、またもうひとりの「ジョイス以降 (After Joyce)」に違いない。

引用参考文献

- Books LLC. *English Teachers: Otto Jespersen, Jack Williamson, Jose Dalisay, Jr., Harold Rosen, Frank McCourt, John Curwen, Lucinda Roy*. Memphis: Books LLC, 2010. 21-24.
- Butler, Samuel. *Erewhon: or, Over the Range*. Eds. Hans-Peter Breuer and Daniel F. Howard. Newark: U of Delaware P, 1981.
- . *The Way of All Flesh*. Harmondsworth: Penguin Books, 1966.
- Gifford, Don. *Ulysses: Annotated*. Berkeley: U of California P, 1974, 1988.
- Gibson, Andrew. *Joyce's Revenge: History, Politics, and Aesthetics in Ulysses*. Oxford: Oxford UP, 2002, 2005.
- Joyce, James. *Dubliners*. Ed. Hans Walter Gabler with Walter Hettche. New York: Garland, 1993.
- . *A Portrait of the Artist as a Young Man*. Ed. John Paul Riquelme. New York: Norton, 2007.
- . *Ulysses*. A Critical and Synoptic Ed. Hans Walter Gabler with Wolfhard Steppe and Claus Melchior. New York: Garland, 1984.
- ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ I』丸谷オ一・永川玲二・高松雄一訳. 集英社、2003.
- . *Finnegans Wake*. London: Faber, 1939, 1975.
- McCourt, Frank. *Angela's Ashes: A Memoir of a Childhood*. London: Flamingo, 1996.
- フランク・マコート『アンジェラの灰』土屋政雄訳. 新潮社、1998.
- .『アンジェラの灰』(上)・(下) 土屋政雄訳. 新潮文庫. 新潮社、1998.
- McCourt, Frank. *'Tis: A Memoir*. London: Harper Perennial, 1999, 2005.
- . *'Tis: A Memoir*. London: Flamingo, 1999.
- フランク・マコート『アンジェラの祈り』土屋政雄訳. 新潮社、2003.
- McCourt, Frank. *Teacher Man: A Memoir*. New York: Scribner, 2005.
- . *Teacher Man*. Penguin Readers Retold by Chris Rice with Frank McCourt's Audio CD pack. Harlow: Pearson Education, 2007, 2008.
- McCourt, Malachy. *Malachy McCourt's History of Ireland*. Philadelphia: Running P, 2004.
- アスミック・エース『アンジェラの灰』東宝、2000.
- 結城英雄『「ユリシーズ」の謎を歩く』集英社、1999.
- Academy of Achievement. *Frank McCourt Biography*. 29 July, 2009. Web. 20 April, 2010. <achievement.org/autodoc/.../mcc1bio-1>
- 'Frank McCourt.' *Wikipedia*. 1 Feb. 2011. Web. 9 Feb. 2011. <En.wikipedia.org/wiki/Frank_McCourt>. *年号など誤りを修正中。
- 'Frank McCourt, Author of *Angela's Ashes*, Dies.' *Time*. Web. 20 April, 2010. <Time.com/.../>
- 'New Lesson from McCourt in "Teacher Man".' *MSNBC*, 2011. Web. 7 Jan. 2011. <today.msnbc.msn.com/.../today-books/>
- 'Last name: Sargent.' *Surname Database*. 1980-2011 Name Origin Research. Web. 11 Jan. 2011. <www.surnamedb.com/Surname/Sargent>
- 'Stuy.edu: about Stuyvesant.' *The online Stuyvesant community*. 2005 Stuyvesant High School. Web. 9 Feb. 2011. <http://www.stuy.edu/about/>

(2011年2月9日)